

岩波
國語辭典
第三版

西尾 実
岩淵悦太郎編
水谷 静夫

岩波
国語辞典
第三版

西尾 実
岩淵悦太郎編
水谷 静夫

岩波書店

岩波国語辞典 第3版

1963年4月10日 第1版第1刷発行
1971年2月5日 第2版第1刷発行
1979年12月4日 第3版第1刷発行 ©

編 者	にし	お	みのる
	西	尾	実
	い	えつ	ろう
	岩	悦	郎
	ぶち	た	
	淵	太	
	たに	しず	
	谷	静	
	水	お	夫

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発 行 所 株式 岩 波 書 店

電話 (03) 265-4111

振替 東京6-26240

印刷：凸版印刷 製本：青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

第三版に際して

幸いに好評で迎えられた第一版の刊行から第二版に至るまでに、八年の隔たりがあった。今回の改版までにも同じく八年たっている。「十年一昔」というが、辞書もまた成長するとの感を新たにしたい。

世の動きに連れて、語にも、その意味・用法にも、移り変わりが見られる。改版理由の一つはこれであるが、十年間程度で国語の状態が一変するとは言えない。改版のいっそう大きい理由は、旧版より更に良い辞書にしたいという、編者としては当然の願いである。この辞典は初めから、小型でありながら単なる言い替えにとどまらない語釈を、という方針を採って来た。学界の意味論の進展に伴い、その採るべきは採り、われわれ自身の研究成果を加えて、ここに全面的な改訂を行った。

辞書の編者の苦心は、許された紙幅に良質の情報をいかに塩梅するかという点にある。小型辞書ではこの制約が特にきびしい。見出し語の採否の決定だけでなく解説の部分でも、絶えずつらい取捨が問題になる。第二版では六百語ほどを新たに収めたが、今回も厳選を経て約一千語を追加した。語釈の整理再編や増強は収録語の少なくとも三分の一に及んでいる。類義語の意味・用法の違いが語釈に反映することにも努めた。品詞の与え方は全般的に再検討して整合を図った。

造語成分としての漢字母を項目に立てるのはこの辞典に始まると言って過言でないが、それらの漢字を要素とする熟語例を、特にその字母が下に付くものを中心に、大幅にふやした。国語辞典の泣き所は、漢字表記語は読み方が分からなければ引けないという点である。巻末「漢字の読み方の手引」はこのための工夫であるが、新版では使いやすいうように体裁を一新した。

新装でお目みえするこの辞典が読者諸氏の御支援を得て今後も成長することを願う。

はじめに

しばしば、日本語のあいまいさということが指摘されるが、これは日本語自身の責任というよりも、日本語を使う人の側に責任がありそうである。各人が、一語一語の基本的意味を明確にはとらえていないで、その場その場でかなり勝手気ままな使い方をするため、社会全体から見ると、結局、その語の意味がきわめてあいまいだということになるのではなからうか。そして、語の基本的意味を明確に記述しておくのは辞書の役目のはずである。

この辞書は、現代の、話し、聞き、読み、書く上で必要な語を収め、それらの意味・用法を明らかにしようとした。携帯用であるため、採録の総語数は五万七千余に過ぎないが、どういう語を採録するかについては、厳密な検討を加えたので、現代人の生活に必要なものはほとんど収めてあるはずである。ただし、固有名詞は除いた。また、現代語の中でも、特に専門家や特殊な人人の間でしか使われないようなものは除いた。また、十分安定したとはいいがたい新語（外来語を含めて）は採録しなかった。採録語を、どこまでも、現代生活に必要なものという観点から厳選したところに、本書の第一の特色があるだろう。

・漢字母を、その字音に基づいて、本文中に排列した。これは、単に漢字辞典を国語辞典の中にまぜようとしたものではない。元来、日本語の中には多数の漢語が含まれている。その漢語を構成する単位としての漢字の働きを明確にする必要があると考えたからである。それは、一般に、接頭語や接尾語の説明が、辞書にとつて欠くことの出来ないものであるのと同じことと言える。ただし、漢字母の場合は、一般の語と違って、字形や字画をはっきりさせる必要があるので、特に大きな活字を用いた。なお、漢字母としてあげたのは二千三百余字である。漢字母を造語成分の一つとして本文中に加えたのは、本書の第二の特色である。

語の意味は必ずしも一つとは限らない。しかし、これまでの多くの辞書は、一語の意味を、あまりにも細かく、しかも並列的に記述

して来たきらいがある。そして、どちらかというところ、その語の基本的意味がなおざりにされていたようである。この辞書では、このことを反省して、出来るだけ、語一語の基本的な意味を説明しようとした。現象的なものよりも、その根底にひそむ根本的な意味を明らかにしようとしたのである。慣用語やことわざを、別の場所に取り出して説明することなく、そのもとになる語の意味の説明と密着させて説明したのも、またこの考え方に基づくものである。この点に、この辞書の第三の特色がある。

なお、日本語の中で最も基礎的な語と思われるものについては、出来るだけ多くの分量をさいて、くわしく意味・用法を記述した。また、意味の説明を記述するのの際には、まず初めに、現在普通行われている意味・用法を解説した上で、以前行われた用法にも触れるようにした。さらに、これまでの辞書では、一一の語に必ず漢字による表記が当ててあった。それらの中には、実際にはほとんど行われることのなかったものもある。そこで、この辞書では、漢字による表記は、実際の文章においてそのように書く習慣のあったものに限った。また、当用漢字表等の出現に伴って表記形が変わったものは、これをも示した。従って、この辞書は、読むためにも、書くためにも、参考になると思われる。これを本書の第四の特色としたい。

辞書は、全く知らない語を知るためのものでもあるが、また、自分が知っていると思ふ語でも、その意味や用法を確かめるために引いてみる必要のあるものである。この辞書が多くの人々のために役立ちうるならば、これに越した喜びはない。

昭和三十八年三月

編 者

凡例

収録した語

- 1 現代語を中心としたが、現代の生活の上で必要と思われるものは古語をも加えた。
- 2 動詞の連用形から派生した名詞は、場合によって省いたことがある。また、形容詞語幹に「み」「さ」が付いて名詞となったものも、特別のもののはかは省いた。
- 3 単語を構成する単位としての、接頭語・接尾語などの造語成分も、出来るだけ取り上げた。漢字母を入れたのも、一つ一つの漢字を造語成分と見たからである。
- 4 単語と単語とが結合して出来た複合語のほかに、単語と単語とが慣用的に結びついているものも「連語」と呼んで取り上げた。

見出し

- 1 見出し
 - イ 見出しには原則として平仮名を用い、現代仮名づかいで示した。古語には「イ」を付け、見出しを歴史的仮名づかいで示した。
「しづのを」(「賤の男」)
 - 「あをひとぐさ」(「青人草」)
- ハ 外来語は片仮名で示し、長音には「ー」を用いた。
「アーチ」

なお、「一語一語の表記は、国語審議会報告「外来語の表記」を参考にした。

バイオリン サンドイッチ

- ニ 活用語は原則として終止形で掲げた。語幹と語尾との区別が立つものは、その間に「ー」を入れて仕切った。

きる「切る」(「四他」)

きれる「切れる」(「下一自」)

- ホ 接頭語・接尾語を一つの独立項目として立てた場合には、次のように示した。

こ「接頭語」

き「接尾語」

2 歴史的仮名づかい

- イ 和語においては、見出しの次に歴史的仮名づかいを示した。ただし、複合語で一部分が仮名づかいの上で問題がないか、または見出しの現代仮名づかいと同じである場合は、その部分を「で示した。

あいだ「間」

あいて「相手」

あおがえる「青蛙」

- ロ 漢語においては、原則として字音仮名づかいを示さなかった。ただし、「様」「相」のように、古くから仮名書きにすることの多かったものは、特に「やう」「さう」とその字音仮名づかいを示した。

3 表記形

- イ 「一」の中に、その語の、書き表し方を示した。ただし、見出しの仮名と全く同じ場合は省略した。なお、表記形がいくつかある場合は並べてあげた。特に、当用漢字表の実施に伴って、新しく国語審議会が認めた表記形をもあげた。

- ロ 漢字で書く語については、当用漢字表や当用漢字音訓表に取り上げられているものと、それ以外のものを、次の記号を用いて示した。

印なし 当用漢字表にある字

あいどく【愛読】

△ 当用漢字表にある字であるが、音訓表にその音訓が取り上げられていない場合

くちもと【口許】

× 当用漢字表外の字。ただし、人名用漢字を含む。

いしがき【石垣】

へへ 当用漢字音訓表付表にある、一続きの漢字で特定の読みを表す、いわゆる熟字訓を示す場合

いなか【田舎】

へへ 前項以外の熟字訓を示す場合

のり【海苔】

ハ 送り仮名は内閣告示「送り仮名の付け方」を参考としたが、送り仮名法は時代によっても異なるので、送らないことが古い習慣である場合、または送っても送らなくてもよい場合には、その部分を（ ）でくくった。

あみもの【編（み）物】

うまれかわる【生（ま）れ変（わ）る】

ニ 西洋系の外来語で、ローマ字で書く形が普通である場合には、この欄にその形を示した。

ピーティーエー【PTA】

4 品詞など（巻末「品詞概説」参照）

イ『』の中にその語の品詞その他の文法上の性質を示した。

□ 次の場合には、その注記を省略した。

□ a 名詞。ただし、特に必要がある時は明記した。

□ b 単独項目として出した接頭語・接尾語

□ c 漢字母

凡例

ハ 動詞はいちいち動詞であることを断っていないが、活用の種類と自動詞・他動詞の区別とを示した。

ゆく【行く】（四自）

よむ【読む】（四他）

いきる【生きる】（上一自）

かきける【掲げる】（下一他）

ニ 形容動詞的に用いられるものは次のようにして示した。

しずから【静か】（タナ）

せいしん【清新・生新】（タナ）

ようよう【洋洋】（トタル）

ホ 漢語・外来語名詞で、「する」を付けて動詞としても用いるもの、あるいは、形容動詞的にも用いるものは、次のような形で、その事を明らかにした。

うんどう【運動】（名・ス自）

けんこう【健康】（名・タナ）

いつてつ【一徹】（名・タ）

アタック【名・ス他】

へ「と」を伴って副詞として用い、また動詞としても用いるものは、次のようにして示した。

いきいき【生き生き】（トス自）

こせこせ【トス自】

ト 文語の形容詞は、ク活用かシク活用かを区別して示した。

のどけし【長閑】（けし）（ク）

うつくし【愛し・美し】（シク）

チ 単語と単語とが結びついた形が慣用的に用いられるものは、この欄に「連語」と記した。

いわずかたらず【言わず語らず】（連語）

凡例

うかぬかおほ【浮かぬ顔】『連語』

見出しの並べ方

1 見出しの排列は五十音順に従った。

2 五十音順で順序のきまらないものは、次のように定めた。

イ 「ん」は「を」のあとに置く。

ロ 清音・濁音・半濁音の順にする。

こうとう【荒唐】 ほんぶ【本部】

こうとう【行動】 ほんぶ【本譜】

こうとう【強盗】 ほんぶ【凡夫】

こうとう【合同】 ポンプ

ハ 促音の「っ」、拗音(き)の「ゃ」「ゅ」「ょ」はそれぞれ、「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」のあとに置く。

ねつき【寝付き】

ねつき【寝付き】 しょう【私用】

ねつき【熱気】 しょう【省】

ニ 外来語を表す時の小字の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」は、普通の仮名のあとに置く。

ふあん【不安】

ファン

ホ 長音符号ーは、その場合の発音が、ア・イ・ウ・エ・オのいずれかであることによって、それぞれの音を表す仮名と同じものと認める。

ガーター は ガアタア の位置に置く

コーヒー は コオヒイ の位置に置く

そして、普通の仮名のあとに置く。

きい【奇異】

キー

3 見出しの、仮名で書いた形が全く同じである場合には、次のように

排列した。

イ 文法的性質の上から次のような順序。

活用語 動詞(四段・上一・上二・下一・下二・変格の順)

動詞型接尾語

形容詞 形容詞型接尾語

助動詞

無活用語 名詞 代名詞 形容動詞語幹 副詞

接頭語 無活用接尾語

連体詞 接統詞 感動詞

助詞

ロ 和語 古語 漢語 外来語 漢字母の順序。

ハ 漢字母の間では、「康熙字典」の字の排列の順序。

4 同音語で意味の似たものは、場合によって同一見出しのもとに収めた。

かしよう①【過小】……………②【過少】……………

5 外来語の場合は、別語であっても、仮名で書いた形が同一である場合は、一つの見出しのもとに収めた。

ライト①光。光線……………④……………▽(1)~(4)はlight

⑤右。⑥……………▽(5)(6)はright

6 次のような場合には、見出しの語を説明した次に、その語を含む複合語を、合わせ掲げて説明した。

イ 和語では、二つ以上の単語で出来ている複合語が、さらに他の語と合して複合語を作った場合。

「ちどり(千鳥)」に対して「ちどりあし(千鳥足)」「ちどり

がけ(千鳥掛)」

ロ 漢語では、漢字二字以上で出来ている熟語が、さらに他の語と合

口 漢語では、漢字二字以上で出来ている熟語が、さらに他の語と合

して複合語を作った場合。

「安全」に対して 「安全器」「安全装置」「安全地帯」「安全ビ
ン」「安全弁」など

ハ 外来語では、その語と他の語と合して複合語を作った場合。

「ゴム」に対して 「ゴム消し」「ゴム長」「ゴムの木」

説明

1 基礎的な語と考えられるものには、特にくわしい説明を加えた。

2 その語の現象的な意味をいちいち細かく分けて説明するよりも、出来るだけ基本的な意味を明らかにするようにした。

3 一語にいくつかの意味を立てた場合には、時代的に古い意味から始めることなく、出来るだけ現代語として最も普通に行われている意味から始める方針をとった。

4 いくつかの意味のうち、古語として特有の意味をもつものがあれば、その区分記号の上に＋を付けて区別した。

しな【品】①何かの用途にあてて、形がある物。……②もの
の等級。④……。……⑤たち。質。「うの花は――劣りて」
(枕)

5 その見出しの語が、常に一定の成句の中に現れるようなものは、その成句の形を、説明の初めに『』で包んで掲げ、その成句全体についての意味を説明した。

あげあし【揚(げ)足】『―を取る』人の言葉じりや言い誤
りをとらえて、なじったり皮肉を言ったりする。

6 語の接続の仕方などの文法的な説明は、『』に包んで、その項の説明の最初に置いた。

7 『さ』①名詞・動詞・形容詞の上に、語調を整えるのに使う。
その意味が特殊の範囲で使われるものであって、理解のために必

凡例

要と認められるものは、『』に包んで、その語の分類を示した。たとえば、

〔仏〕〔＝仏教語〕 (俗)〔＝俗語〕

〔宗教〕〔哲学〕〔法律〕〔経済〕〔取引〕

〔数学〕〔物理〕〔化学〕〔天文〕〔音楽〕

8 意味の理解を助けるため必要な場合、↑を付けて対義語を示した。対義語は、見出し語にないものも掲げた。

げんいん【原因】〔名・ス自〕……。↓結果

9 他の項目を参照すべきものは、↓を付けて、その項目を示した。

ね【子】十二支の第一。……。↓じゅうにし

10 意味の理解を助けるために、つとめて用例を「」に包んで掲げた。また、用例のうち、意味のわかりにくいものや、ことわざ・成句などについては、その解釈を()で包んで掲げた。

きよくじつ【×旭日】朝日。「―昇天の勢い」

あら【新】……。「年寄りに―湯」まだだれもはいてい

ない湯は毒

あく【灰汁】①……。③……。―の抜けた人(俗氣

がない、または粹(じ)な人)

11 古典から用例を引いた場合は、原則としてその書名(略称)を用例のあとに()に包んで示した。たとえば、

(記) 古事記 (書紀) 日本書紀 (万) 万葉集

(古今) 古今和歌集 (伊勢) 伊勢物語 (枕) 枕草子

(更級) 更級(き)日記

ただし、作品名を掲げず、作者名によったものもある。

(近松) 近松門左衛門の作品

(芭蕉) 松尾芭蕉の句

(子規) 正岡子規の俳句または短歌

凡例

(一葉) 樋口一葉の作品

- 12 用例中の、見出し語に当たる部分は——で略す。ただし、活用語で見出しの形とちがう活用形が使われている場合は、語幹を——で表し、——を付けて語尾を添える。また、語形全体がちがう形の場合は、略さないでこれを太字で示す。

あいかん【哀歓】……「——を共にする」

ういける【受ける】……「下一他。……①……②……④うけられる。……「試験を——」けて立つ」

た【助動】……①……④……「勝負あつ——」雨が降ったら取りやめる」

- 13 ▽を付けて語源、外来語の原つづり、あるいは補足的説明を加えた。

- 14 西洋語からの外来語の原つづりは、日本語に直接はいつたと思われる言語をあげた。また、同時にその言語名を明記した。ただし、英語の場合は省略した。

アーチ①……②……△arch

トルソー……△torso

- 15 形容動詞以外の活用語で、文語の活用型、または語形が口語とちがう場合には、解説の終わりに図の記号の下にその文語の語形および活用の型を示す。

あびる【浴びる】^上一他^下……図あ^上ぶ^上二^下

漢字母項目

漢語の造語成分という観点を中心にしてえらんだ漢字を、その字の字音に従って、本文中に排列した。

1 表記形

イ^上の中^下に示した漢字は、字形・字画をはっきりさせるために、

一般項目より大きい活字を使った。

□ 漢字には、次のような記号を右肩に付けた。

印なし 次項*以外の当用漢字

* 義務教育で読み書きを教える字、いわゆる教育漢字

× 当用漢字以外の漢字

ちょう【超】 ちょう【*長】 ちょう【*謀】

ハ【】の次に「」に包んで旧字体で示した。

とく【*徳】【徳】 じつ【*実】【實】

2 音訓

イ 一般に使われる音を片仮名で、訓を平仮名で示した。

□ 音は現代仮名づかいで示し、字音仮名づかいが現代仮名づかいとちがう場合は、これをその下に（ ）に包んで示した。

ハ 音訓のうち、太字のものは、当用漢字音訓表に取り上げられているものである。

かい【*回】^{カイ(クワイ)} まわる^{エ(エ)} めぐる^{かえる}

3 その他

イ 意味説明のあとに、その用例を「」に包んで掲げた。

か【*仮】【*假】^{カケ} かり^{かす} 仮面……「仮装・仮説・仮託・虚仮①・仮名」

□ その字の比較的良好に使用される古字・正字・同字などを意味説明のあとに、▽を付けて、注したものもある。

か【*歌】^カうた^{うた} ①……②……▽「哥」は古字、「謠」は

あ

あいえんきえんも「合縁奇縁合縁機縁」人の交わりには互いに気がよく合うことゝ合ふ。それは不思議な縁によるのだということ。

あいおいゆ「相生」①一つの所から互いに接してはえ出ること。「一の松」②夫婦が共に年とるまで長生きすること。▽同音なので相老の意に使う。

あいか「哀歌」悲しみの心を述べた歌。エレジー。

あいかき「合鍵」一つのかぎのほかに、その錠に合う他のかぎ。また、①の錠に合せて作ったかぎ。

あいかた「合方」①歌い手に対し、三味線(さんずいせん)をひく者。②芝居のせりふの間などに入れる三味線。③長唄(ながうた)の合(あ)の手(て)の長いもの。④歌曲の囃子(はし)方(かた)。

あいかた「相方」①あいて(い)。②遊客の相手の遊女。▽②は多く、敵(てき)と書く。

あいがも「間鴨・合鴨」マガモとアオクビアヒルとの雑種。肉は食用。

あいかわらず「相愛(あひあい)わらず」①「連語」今までのとおり。いつもと同じように。「皆一(みなひと)元氣(げんき)です」。

あいかん「哀感」かなしい感じ。悲哀感。

あいかん「哀顔」かなしみとよぶこと。「一を共にする」。

あいがん「哀顔」名・ス自他「人の同情心にうったえて物事を頼み願うこと」。

あいがん「愛玩」名・ス他「大切にしていること」。

また、おもちゃにして憩(やすみ)むこと。

あいきほ「間着(あひだぎ)」春や秋に着る洋服。あいく。▽夏と冬の間に着るから。②上着と下着との間に着る衣服。

あいきどろ「合気道」古流柔術の一つ。当て身(あてみ)や、関節(かんせつ)を主とするもの。

あいきやく「相客」①宿屋で同室にとまり合わせた客。

②同席の客。

あいきよう「愛敬・愛嬌」①女子供などがこにこしてかわいらしいこと。「一のある娘」。転じて、(人)動物がこにこけいなこと。「狼は一者だ」②商人・芸人が他から好かれようと、人付きよくふるまうこと。「一を振りまく」。

あいきよう「愛郷」自分の生まれた土地(故郷)を愛すること。「一心」。

あいきようげんも「間狂言」能の中で狂言師の受け持つ演技、またはその役柄。▽単に「あい」と言う。

あいきん「愛吟」名・ス他「詩歌を好んで口ずさむこと」。

あいくち「合口」①つばのない短刀。九寸五分(きゅうすんぶん)。▽①「首」とも書く。②相手として調子のあうこと。「彼とは一がよい」。

あいくるしい「愛くるしい」①「形」見るからにかわいらしいいけん。②犬がわいてくる犬。③犬をかわいがること。「一家」。

あいくち「たがいに勝ち負けのないこと」。「勝一敗(お)お」。

あいこ「愛顧」(客が商人・芸人などを)顧(こ)みる。に、目をかけ引き立てること。「お客様(きようきよう)の御(ご)にむくいて」▽顧(こ)みされる側(がわ)から言う語。

あいこ「愛護」名・ス他「かわいがってかばい守ること」。

「動物」。

あいう「愛好」名・ス他「物事を愛し好むこと」。

あいく「愛国」自分の国を愛すること。「一者」「一心」。

あいく「愛言」①前もって打ち合わせてある合図の言葉。「山」と問(と)いかけた「川」と答(こた)えるなど、おたがいが仲間であることを示すもの。②大勢の間で、ある主張の旗印(はたし)として使う言葉。標語(ひょうご)。モットー。▽戦後(せんご)日本の「民主主義」だ。

あいう「愛妻」大事(だいじ)にしている妻。②妻を愛し大事にすること。「一家」。

あいう「挨拶」名・ス自「人と会ったとき取りかわり儀(ぎ)の動作(どうさ)」。言葉「初対面(しよたいめん)の」②儀式・就任(しうにん)などの時、祝意・謝意・親愛(しんあい)の意などを述べる言葉。「一場(いちやう)の」を述べる。「一状(いちじやう)」「応対(おうたい)」「返事(へんじ)」「知らせたのに何(なに)の」もない。▽も、と仏教語。

あいう「哀史」悲しい出来事を記したものの「女工」。

あいう「哀詩」悲しい事をよんだ詩。

あいう「愛児」親(おや)がかわいがっている子供。いとこ。

あいう「愛着」名・ス自「愛情にひかれて思(おも)い切れないこと」。「愛(あい)いちゃく」とも。もと仏教で欲望(よきぼう)にとられて離(はな)れられないこと。

アイシヤドール まぶたに青色・灰色などの化粧(けしょう)をすること。

また、その化粧に塗(ぬ)るもの。顔に陰影(かげ)をあたえる。▽影(かげ) shadow

あいう「哀愁」もの悲しき。うら悲しい感じ。

あいう「愛執」欲望(よきぼう)にとられて心が離れないこと。愛着(あいしやく)。▽仏教語から。

あいう「愛書」本(ほん)が好きなこと。「一家」。

あいう「相性・合性」①陰陽五行(いんやうごうぎやう)説(せつ)で、男女(なんにょ)の性(せい)が合うこと。生年月日(せいねんげつにち)を五行(ごぎやう)に割り当て、水(みづ)と木(き)と金を相性とするなど。結婚(けっこん)などによいとした。②性格(せいかく)のよく合うこと。「一がよい」。

あいう「哀傷」悲しいたむこと。いたましい感じ。

あいう「愛唱」名・ス他「好んで歌うこと」。

あいう「好んで口ずさむこと」。「牧水(ぼくすい)の歌を」▽②は愛語(あいご)とも書く。

あいう「愛差」氣(き)にいらぬめかけ。

あいう「愛称」親愛(しんあい)の氣持(きもち)を含めて呼ぶ特別の名。▽人間(にんげん)以外(いがい)の物(もの)についても用いる。

あいう「愛嬌」親(おや)がかわいがっている娘(むすめ)。まなむすめ。

あいう「愛情」相手にそそぐ愛の氣持。①深く愛するあたたかな心。「母(はは)の」仕事(しごと)に「一(ひと)を持つ」②異性(いせい)を恋慕(こほ)う感情(かんじ)。

あいう「合印」①味方(みかた)を敵(てき)と間違(まちが)えないように区別(くべつ)をつけるしるし。▽②は多く、合標(がひょう)と書く。

あいう「愛人」①恋愛(れんあい)の相手。こいびと。▽第二次大戦(だいにだいじきだせん)後(ご)、新聞(しんぶん)等で「情婦(じやうふ)」「情夫(じやうふ)」を避(よ)けてこの語(ことば)を使い、恋人(こいびと)でなく「人(ひと)のような表現(ひょうげん)も生(な)じた」。

②だれかれにかたよらず人(ひと)を愛すること。「敬天(けいてん)」。

あいう「愛す」①「四他(よにた)」あいたする。

アイス「氷」。

②俗(ぞく)「高利貸(たかりがせ)」。▽氷(こ)の訳(わけ)「水(みづ)と音が通(と)るので、明治時代(めいしじだい)にもって使(つか)った」。▽キーンデー

果汁(くわいじ)を冷凍(れんとう)した、一種(いしゆ)の水菓子(みづかし)。▽日本(にっぽん)で、ととととを合(あ)わせて作(つく)った語。クリーン牛乳(ぎゅうにゅう)、卵(たまご)の黄身(きん)に砂糖(さとう)香料(かうり)を加(く)え、まぜ合(あ)わせて凍(こ)らせた菓子。氷菓子(こおりかし)。ice cream

「ホッケー」氷上(こおりじやう)でスケートをはいてするホッケー。Ice Hockey

あいう「合図」互(たがひ)いの約束(やくそく)にもとづいて、ある事柄(ことば)を知(し)らせること。その方法(はうほう)。

あゝいそ「愛する」(「サ変他」)それに對し愛をそそぐ。④
かわいがりがいしくしむ「子を」。心から大切に思う。
「國を」①異性を恋ひ慕ふ。②物語を強く好む。「酒を」
——因愛する(愛)
あいせき「愛憎」(名・ス他)人にいりのむこ。
あいせき「哀憤」(名・ス他)人の死をかなしみ惜しむこと。
あいせき「愛憎」(名・ス他)大切にし、手放したり損ねたりするの
ことを惜しむこと。①の念。氣に入つて大切にすること。
こと、故人の——した品
あいせつ「哀切」(タタ)非常にあわれめて物悲しいこと。
あいぜつ「哀絶」非常に悲しいこと。
あいぜん「愛染」①煩惱。②愛着に染まる意から出た。
②愛染明王の略。③みょうおう「明王」(仏)三目
六手をそなへ、怒りの相をあらわし、愛欲を支配する神。
アイゼン 鉄製の登山用かんじき。アイ、Steinhard から。
あいそ「哀訴」(名・ス自他)同情を求めてなげき訴えるこ
と。
あいそ「愛想」①にやかで人づきのよいこと。②のよ
い人——に寄せる愛情・好意。「―がつきる」(あき
れてい)になる。「―をつかさ(いや)になつて取り合な
くなる」(おー(おせじ)を言う)③料理屋の勘定。「ね
えん、おー」(おせじ)の転。「―づかし」(一尽か
し)「愛想がつて取り合わなくなる」こと。
あいそう「愛想」あいそ(愛想)
あいそう「愛憎」愛することと憎むこと。個人個人に對す
るすきらしい「―」の念がなはだしい。個人個人に對す
あいそう「愛憎」(名・ス他)大事にしまつておくこと。
あいそく「愛思」親がかわいがつてゐるむすこ。
アイソトプ 同じ元素で原子量が異なるもの。同位元素。
同位体。Isotope
あいだ路「間」①これとそれとの二つのものにはさまれた部分。大阪から広島までの都市「間」との——にある素数。特に、限られた一続きの空間・時間。「そこま
でいゝい道だが、三日の——高熱が続いた」(2)の——
転。②空間や時間の、ものがきれてゐる(割合に小さ
い)爆發音がきこえる。絶えぬ。木立の——から山が見える。
「爆発音がきこえて響く」(空間)——から山が見える。
義 ③この「——」現在に近い過去を漠然(むく)とときす言ひ

方。④関係。あいだから。仲。「彼との一がまずく致し候」
ワ(1)の転。⁽²⁾「御受納被下度候」ワ(1)の転、それもこれも一様
きの限られた範囲内にあるというとなえ方から。
あいたけい【相対】おさむかい。当事者だけで事を行う
こと。⁽³⁾合意。「お前と私との事でござる」三言
―すく(他人をまじえず二人で相談して事を決める
こと。
あいだから始【間柄】人と人との関係。④血族・親類の続
きあい。続柄。親子の―で水くさい。㊦つきあい。関
係。「二人の一はよくない」
あいだい【詰り・間食い】食事と食事との間に物を食べる
こと。かんじゅう。
あいたしゆき【愛他主義】他人の幸福・利益を行爲の目的
とする主義。利他主義。マオーギュスト・コントが唱え出
した。
あいぢやく【愛着】《名・ス目》↓あいじゃく
あいぢよう【哀調】もの悲しい調子。
あいぢう【愛重】《名・ス他》愛して大事にすること。
あいぢう【代】あのやつ。《あれ》の乱暴な言い方。マあや
つゝの転。
あいぢう【相槌】「一を打つ」人の話を聞きながら、同
意・同意感のしるしにならず。人の話に調子を合わせる
マもど刀を作る時など相手となつて槌(ツ)を入れる
こと。むづつち。
あいて【相手】①自分といふしよに物事をする人。相
棒。仲間。②物事をするととき、行爲の対象となる人。先
方。「話し」の「結婚の――にしな」③自分と対
抗して物事を争う人。「一に取って不足はない」「かた
争ひの相手とする」特に訴訟の相手として訴える
アイデア（新たに始める）物事の、中核となる考え。着想。
あいぢい【相かぶろ】vater
兄弟。同伴。

あいにく【哀悼】《名・ス他》人の死を悲しみいたむこと。
あいにく【愛読】《名・ス他》その書物を好んで読むこと。
「著」「書」

アイドル(偶像、崇拜するもの、ワロシ)
あいなし(○)面目がない。かわいげがない。(梨^①)
あいの花、……にその色よりしてよく見ゆるを(○枕^②)
とましい。……く目をそぼめつつ(源氏^③) わけもない
「く涙くみたり(源氏^④) ④言いようがない。……く世
の人よろこび申す(栄花)

あいなめ あいなめ科の浅海魚。普通、緑を帯びた茶色。長
さ約三〇センチ。食用。あぶらめ。
あいなる(○)相成る(四目) ↓あい相 (2)
あいにく(○)生憎(副々) それをしようとするのに、都
合の悪い状態にあること。ぐあいが悪いことに。――
(○)かを引いて欠席した(遠足には一の雨だ)――な
ことに「おーさま」あやかにの転。
あいのこ(○)合の子・間の子 ①種類の違う生物または異
人種の間に生まれた子。雑種。混血児。 ②どちらともつ
かない中間のもの。
あいのこ(○)合の手・間の手 ①三味線(三曲)で歌と
歌との間に入る三味線だけの間奏。 ②話・物事の進行
に応じて、他の者がさしはさむ言葉・物事。――を入れ
る。
あいのり(○)相乗り(○)車などいっしょに乗ること。
あいは(愛馬) ①かわいがって大事にしている馬。 ②馬を
かわいがり。
あいはん(○)合判 ① ↓あいいん(合印)。 ② 連帯でおす
印。
あいはん(○)間判合判・相判 紙の大きさの一種。 ①ノ
ートなどで仕上がり寸法が縦七寸(約二一センチ)、横五
寸(約一五センチ)の大きさ。 ②写真乾板で小判と中判と
のあいだの寸法。縦一三センチ弱、横一〇センチ強。
浮世絵版画で縦一尺一寸(約三三センチ)、横七寸五分(約
二三センチ)のもの。
あいびき(○)逢引き(嬌曳) (愛しあっている)男女がひそ
かにあつこ。ランデブー。
あいふ(○)合付 駅で手荷物を引き受けた時、その証拠に
渡す券。
あいふ(愛撫)「名ス他」なでさすってかわいがること。
あいふく(愛撫)「名ス他」なでさすってかわいがること。
あいふく(○)間服合服 ↓あいぎ(1)

あおあお青「青青」(トス自)いかにも青いさま。また、一面に青いさま。―(と)した麦畑」

あおあらし「青風」青葉のころに吹く、やや強い風。▽

「せいりんと」も言う。

あおい「青い」形 ①青(白)の色をしている。▽緑の場合にも通じて使う。「一芝生(い)」「青い(い)感じを与える」。

②顔色が悪い。青さめて血の氣(き)がない。「一」になる(危険や重大な過失で青さめる)。

③未熟だ。「一果実」「一」ことを言ふ「日翻辞書」図をあを「ク」

あおいひ「葵」①あおい科の植物の総称。モミジアオイ、タチアオイなど。②紋所の名。―の御紋(徳川家の紋、三つ葵をさす)。

あおいき「青息」心配などのおまり弱ってはいくためいき。そのための出るような状態。

あおいまつり「葵祭」京都市下鴨(鴨)神社と上賀茂神社の祭り。昔は陰暦四月の中の酉(う)の日、今は五月十五日に行う。賀茂祭(かまつまつり)。

あおうなばら「青海原」青くひろびろとした海。大海。

あおうま「青馬」①青みがかった黒い毛の馬。②「白馬」(白馬)の略。宮中の年中行事の一つ。陰暦正月七日に左右馬寮(りやうばさう)から引き出された白馬(びやくば)を天皇が御覧になる儀式。

③あし毛または白い毛なみの馬。▽(2)(3)は中古文では「白馬」と書いた。

あおうめ「青梅」まだ熟さない青い梅の実。

あおえんどう「青豌豆」トクリビース

あおい「青貝」①蝶螺(てつら)の材料とする、真珠光を帯びた貝。夜光貝・あわび等の貝殻。②青貝細工の略。

螺細工で、薄い目を使ったものをいう。

あおがえる「青蛙」かえるの一種。背が緑色、腹が白く、アマガエルに似て少し大形。

あおかび「青蟹」もち、蜘蛛(く)の果物などに生ずる青みがかった緑色のかび。

あおがき「青刈り」飼料などにするため、作物の成熟しないうちに青草として刈りとること。

あおき「青木」①青草としてした木。生木(なまき)。②常緑樹。ときわき。③みずき科の常緑低木。葉は楕円(だえん)形で厚く、つやがある。冬、赤い実を結ぶ。雌雄異株。庭木。

あおきり「青桐・梧桐」あおきり科の落葉高木。幹は

緑色、葉はひろく長柄がある。夏、薄黄色の小花が群がり咲き、実が熟さないうちに豆の形の種が出る。

あおぐさ「仰ぐ」①顔を上に向ける。②上方を見

る。「天を」。

③「毒を」毒をあおむいて「飲み、見

上としていただく。「聖人の徳を」「会長に」。

④「尊敬する人目上の人に教へ指示を求める」「指図を」。

あおぐさ「扇く・煽く」④他「うちわ・おうき」等を動かして風をおこす。

あおくさ「青草」青草とした草。

あおくさ「青臭い」形 ①青草を切ったときのよう

なにおいがする。②未熟だ。「一意見」図をあをくさし

「ク」。

あおくろい「青黒い」形 青みがかった黒い。図をあをくろし「ク」。

あおげ「青毛」馬の毛色で、青みを帯びてみえる黒色。

あおき「石尊」浅海の岩につく、あおき科の緑藻類。

薄い葉状で、大小不定の穴がある。食用。ちさり。

あおさし「青緒」青く染めた麻縄でつくった銭(せん)。

また、それにさした銭。

あおさむらい「青侍」①若くて、ものなれない(官位の低い)侍。②六位の侍。▽六位の者は青い衣服を着たから。

あおさめる「青さめる」(下)自「血の氣(き)を失って」

顔色が青白くなる。図をあをさむ「下」。

あおじ「青地」地色(じしき)の青いこと。そういうもの。

あおじやしん「青写真」図面などの複写に使う写真の一種。図形や文字が青地に白く出る。転じて、未来へのおおきな計画。

あおじろい「青白い・蒼白い」形 青みがかった白い。特に、(顔などが)青さめて血色が悪い。「一きインテリ」図をあをしろし「ク」。

あおすじ「青筋」青色の筋。特に、皮膚の上から見える静脈(じようみく)。

あおた「青田」稲が青草とおこる田。また、まだ実つていない田。「一がい」「一買い」。

また、稲が青いうちに、収穫量を見越してその田の米を買い取ること。

あおだいしょう「青大将」へびの一種。体の色は緑がか

り、無毒。日本で最大のへびで、大きいのは三メートルに達する。

あおだけ「青竹」①幹の青い竹。②苗の異称。

あおだたみ「青畳」新しく表が青青している畳。

あおだた「青立ち」まだ熟さずに青い色のままで稲がはえていること。そういう稲。

あおっぱい「青っぱい」形 ①全体として青が主となつた感じの色合い。②あおくさい。

あおてんじょう「青天井」青空。▽空を天井に見立てて言う。

あおどうしん「青道心」僧になったばかりでまだ仏道を十分におさめていない人。

あおな「青菜」青い色の菜。「一に塩(青菜に塩をふりかければしおれることから、元気がなくしおれる意)」

あおに「青二才」年若く経験の乏しい男。▽ののしって言う言葉。

あおのく「仰く」①(四目)↓あおむく(一)。(下)二他↓あおむける

あおのける「仰ける」(下)一他↓あおむける

あおのり「青海苔」糸状の緑藻類。内海・河口などでとれる。干して食用とする。

あおは「青葉」①ことしになって新たに出了若しい葉。若葉。また、若葉の茂つたもの。②緑色の、木の葉。

あおはな「青蜂・蒼蜂」腹が金属のような光沢のある青色の、大形のはな。▽うるさくつきまとう者をのしるのに言うことがある。

あおぼと「青鳩」▽やまと(3)

あおぼと「青ぼと」四目。青みを帯びる。

あおびうたん「青瓢箪」まだ熟していない青いひょうたん。転じて、顔色の青い人をあさけつて言う語。

あおふくれ「青膨れ」色が青くむくんだように見える人。また、ふくれの様子。

あおめ「青豆」①ダイズの一種。実が緑色で大粒。

②グリーンピース。

あおみ「青み」①(他の色に加わった)青い色合い。「一を帯びる」。

②「一がかったガラス」。

③吸い物・焼き魚などにそえる緑色の野菜。▽み、を味と書くのは当て字。

あおみどろ「水田・沼・池にただよう、糸状の緑藻類。あ

みどり。

あおむを「青む」四目、青くなる。緑になる。「一み渡ったま煙」。顔色が青白くなる。「いたうーみやせて」(源氏)。

あおむくは「仰向く」①「四目」首をそらし、またはからだを横たえて上を向く。あおのく。②「下二他」↓あおむける。

あおむけるは「仰向ける」①「下一他」上を向ける。顔が上を向くようにする。因あふむく下二。

あおむくは「青虫」蝶々・蛾の幼虫で、毛やとげのない緑色のもの。特にモンシロチョウ・スジグロシロチョウの幼虫。

あおもは「青物」①野菜の総称。「一市場」▽もと女房言葉。②皮が青い魚。例、いわし・さば。

あおやかは「青やか」ダナ。青青としているさま。あおやきは「青柳」①青々と枝葉をたれのぼした、やなぎ。②ばか貝のむき身。

あおりは「(陣)泥陣」馬具の一つ。鎧と馬のわき腹との間に下げたかわ製のどうよけ。▽足触の意。あおりは「(陣)泥」①あおりの結果。②強い風による衝撃や動揺。「爆風の—をくつ」③強い作用の余勢。「バニックの—で倒産した」④煽動(煽)「—行爲」

あおるは「煽る」①「四他」①うちわなどで風を起こして火の勢いを強める。②風が物をばたつかせる。ひるがえる。また、そのように動かす。「足を—って泳ぐ」③そのかす。煽動(煽)する。おだてる。④取引、自分の意思(煽)とおりにしようとする、むやみに売買して相場を狂わす。⑤物事に勢いを付ける。「彼が仕事を—で忙し

い」⑥あふみで、陣泥(泥)を打って馬を急がす。⑦四自「風に吹かれて動く」「木戸が—」

あおるは「(陣)泥」あおむいて、一息に飲む。▽酒をぐいぐい飲むことをさす場合が多い。

あか「赤」①人の血や夕焼け空のような色。三原色の一つ。また、その系統の色。▽後者の場合には「赤犬」のように茶色にも言う。「赤靴」は茶色の靴。「赤い靴」と区別される。「朱」②「明る」と同語源。③赤色と関係のある次のようなもの。④交通信号の、止まれ。⑤紅白試合で、赤(白)を印にする方の側。↑白。⑥共產主義者、社会

主義者、左翼などの俗称。▽革命旗が赤色だから言う。

⑦赤茶色の毛色の犬など。⑧赤あずき。「一のまんま」(せきはし)⑨あかがね。銅。⑩あかんぼう。⑪すく目につくほど、はつきりしていること。紛れもないこと。「一(の)全くの他人」「一恥」

あか「赤」①皮膚のうわ皮が汗あぶら、ほこりとまじって出るよこれ。▽よれ・けがれたたえにも言う。「心の—」②水の中の不純物がうつわの底になたまってしまったもの。水あか。③「塗」舟底にたまった水。▽舟乗り・漁夫が「水」と言うのを忌んで、こう呼ぶ。「閑伽」の転か。

あか「(閑)伽」仏前・臺前に供える水。▽梵語。④「一だ」な「一棚」仏に供える水や花を置くたな。⑤「電燈があかか」と「明」と「(明)き」わけて明るさま。「電燈が—ともる」⑥「赤」と「(赤)ま」まっかなさま。「夕日が—さす」

あか「(赤)ま」①「(赤)ま」赤(赤)の色をしている。「恥じて—くなる」②「赤面する」③「一気焰」(女)があげる気焰。④「(俗)共產主義的だ。左傾している。▽明る」と同語源。文語「あかしは明る」にも「赤い」にも使う。因あかし「(赤)ま」

あかいわし「赤鰯」①ぬかづけにしたいわし。それを干したいわし。②さびた刀。▽あかいわし(刀)に似ているから。

あかえい「赤」①「赤」菱形色の—メートルほどの軟骨魚。黄褐色で、尾に有毒のとげがある。南海の産。食用。あかがね「赤貝」海産の二枚貝の一種。殻は心臓形で、みぞが四二、三本ある。肉は赤くて美味。

あかがえるは「赤」蛙「かえる」の一種。背は赤茶色で斑点(斑点)がある。本州至る所の山地・山間部に住む。あかがね「赤」煙「がな科」の常緑の高木。高さ一〇メートル以上になり、材は赤く、質が堅いので用途が広い。

あかがね「銅」赤金。銅。▽赤みを呈するから。単に「あか」とも言う。あかがみ「赤紙」①赤い色の紙。②「(俗)軍の召集令状。また、差押えの紙。

あかき「赤木」①皮をはいだままの丸木の材木。↑黒木。

②赤い色の木材。ウメ・カリン・シタンなど。

あがき「足掻き」あがくこと。②じたばたすること。「一が取れない」(自由)に動けない。どうしようもない)③馬が前足を地面をかくて進むこと。

あがきつは「赤切符」もとの汽車の三等乗車券の通称。▽赤い色をしたことから。

あかき「(赤)切」寒さのために手足の皮が裂けたもの。あがく「足、掻く」四自①じたばたする。もがく。②馬などが前あして地面を掻く。また、そのようにして進む。

あかぐろい「赤黒い」形、赤みがかった黒い。因あかぐろ「赤く」

あかげ「赤毛」①赤みをおびた髪の毛。②馬の毛色で赤茶色のもの。

あかゲット「赤ゲット」①赤い色の毛布。②都見物の田舎者。おのぼりさん。▽明治時代に東京見物の地方人の多くが、赤い毛布(ゲット)を羽織っていたから。③ふなれな洋行者。

あかこ「赤子」生まれてまもない子。

あかこう「赤子」赤郵便袋の旧称。(書留など)重要な郵便物を送るのに使う、赤い色の袋。

あかさ「(葉)田野に自生する、あかさ科の一年生植物。高さ一メートルに達する。葉は三角状卵形。若芽は紅色の粉に覆われる。若葉は諸種のビタミンを含み、食用になる。茎を乾かして老人用のつえとする。「一の葉」(粗末な食物のたとえ)

あかさ「(赤)糖」精製しない赤茶色の砂糖。

あかさび「赤」鉄などに生ずる赤い色をさび。あかし「(赤)物事がはつきりしてして暗さがない。①「明」し「あきら」か。あかるい。「—き心」(邪心のない誠意に満ちた心)②「赤」し「—あかい」

あかし「(明)石」あかしちぢみの略。夏物の、ちぢみの絹織物。▽明石の人がつくり始めたと言う。